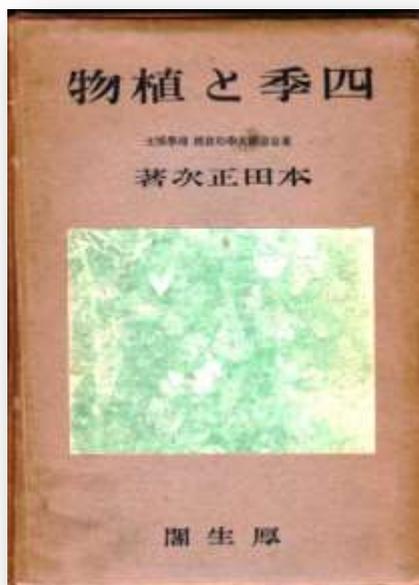


# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第21号

(2014年2月)



北光クラブ  
自然観察クラブ

本田正次『四季と植物』  
(昭和16年7月18日・厚生閣発行)

「春のめざめ」より「春の野草」

麗かな陽光を体一ぱいに浴びながら、清らかな空気を胸一ぱいに吸いながら、四月の郊外の摘草ほど家族の健康のためにも、また愛児の理科のお稽古のためにも適したものはない。そこで今月はそうした摘草の手引として野原や道端に普通に見られる植物のお話を簡単にわかりやすくお話して見よう。それには花の色分けにしてお話した方がわかりやすいかも知れない。

先ず黄色の花を開くものにタンポポがある。タンポポの花は一寸見ると小さい花卉が幾重にも重なり合っているように見えるが、実際はそうではなく、小さい花卉のように見えるものが実は一つ一つの花で、その証拠にはあの小さい中に雄蕊も雌蕊もちゃんと備わっているからである。即ち一寸見てタンポポの花と思われるものは本当は小さな花が集まったもので、これはタンポポの属するキク科の特徴である。タンポポの類は近年沢山の種類が発見されて来たが、一般家庭の人はみなタンポポだと思っても差支ない。但し四国や九州などでは白い花を開く種類が多いが、これはシロバナタンポポと称して黄色い花のタンポポと区別して覚えねばならぬものである。即ち白い花のものを単にタンポポと称するのはよくない。タンポポでもシロバナタンポポでも摘草の時に茎や葉を傷つけるとお乳のような白い汁が出て来るので、もしや毒草ではないかと思う人があるかも知れないが、決して毒草ではない。日本では余りないが外国ではタンポポの類を食用にする所もあるくらいである。タンポポの花は夕方になると凋む性質があるので摘草の帰りなどに気をつけて見ると面白い。タンポポに似て黄色い花を開くキク科の仲間にはジシバリ、オオジシバリ、タビラコ、ヤブタビラコなどがあり、みなタンポポより優しい小さい形をしている。ジシバリは路傍に一番普通なもので糸のように細長い茎が横に長く



匍って拡がり、丸い葉が幾つも着いている。オオジシバリは田圃の畔などに多く、ジシバリに似ているが葉も花も大きい。タビラコは水田の耕した跡に多く生じ、タンポポの小さいよ

うな形をした葉を地面に拵げ、十糎許の莖を出して小さい花を開く。この草が沢山生じた時には田面が一面に黄色く見えることさえある。田圃の面に平たくなって生える小さい草だから田平子というが、植物学者は大抵コオニタビラコといっている。またこの草は春の七草で仏の座というものであって、まだ花の出ない間に摘み取って食用とする。春の七草は、「セリ、ナズナ、オギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ、これぞ七草」という歌でわかる通り、早春食用に供すべき七種の草を称したものである。この中スズナは今の蕪のことで、スズシロは今の大根のことであるから、この二つは野草ではない。他の五つはみな野草で、その中の仏の座は今述べたタビラコのこと、他の四つについては後で話そう。タビラコに似て路傍などに出て来るのがヤブタビラコで、形が稍々大きく、これは食用にはならない。オギョウは御行と書き、これもキク科の一種であるが、今まで述べたキク科の仲間のように白い汁は出ない。高さは二十糎内外、真直に立った莖にも筧のような形をした葉にも一面に白い柔かい毛があるので直ぐに見分けがつく。花も黄色ではあるがタンポポやタビラコの類とは大分様子が違い、花卉らしいものもなく、細かいものがごちゃごちゃと集まっている。葉を餅に搗き交ぜて丁度ヨモギの草餅のようにして食べるのが習慣である。オギョウは今ではハハコグサ即ち母娘草といっているが、本当はハウコグサといった方が正しい。次にキク科以外の黄色い花ではバラ科のヘイチゴ、キジムシロ、ミツバツチグリなどが普通であり、みな五弁の可愛い花を開く。キジムシロは葉が羽状複葉といって小さい葉が何枚も対をなして一枚の葉をなしているが、ヘイチゴとミツバツチグリとは必ず三枚の小さい葉から出来ている。ヘイチゴの方には花がすむと間もなく食べる苺の実のような赤い実が出来るので直ぐわかるが、ミツバツチグリの方は美しい実が出来ない。ヘイチゴの赤い実を大抵の人は毒だと思っているが、決して毒ではない。といって食べても不味いので食用にはならぬが、これを最初から有毒だとわけもなく思い込むのはヘイチゴのために全くの濡衣である。アブラナ科に属するイヌガラシ、スカシタゴボウ、イヌナズナなども小さい四弁の黄花を開く。イヌナズナには大抵全体に毛が多いが、イヌガラシとスカシタゴボウには毛がない。イヌガラシの実には長いスカシタゴボウの実には短い。同じ四弁の黄色い花でもヤマブキソウというのはヤマブキに似た大きな花を開く草で、直ぐ他と区別がつくが、これはケシ科に属し、莖や葉から黄色い汁が滲み出てこれは

毒草である。毒草にはまたウマノアシガタ、キツネノボタン、タガラシなどという雑草が  
あって、みなこの頃黄色い五弁の花を開く。実の形もみなよく似ていて金平糖のよう  
な恰好をしている。タガラシは多く水田の中に出来て、茎葉に毛がなく、つやつやし  
て実の形も長い。ウマノアシガタは普通キンポウゲと言われ、キツネノボタンと同様に  
茎葉に粗い毛がある。ウマノアシガタの花の方が大きくて光沢が多い。

今度は白い花を開くものに着いてお話ししよう。先ずキク科では一番最初に述べたシ  
ロバナタンポポくらいで、他はあまり普通なものはない。春の七草の間ではナズナ  
とハコベラとが白い花を開く。尤もセリも白い花を開くが、これは夏だからここには述べ  
ない。ナズナはアブラナ科に属し、俗にペンペン草と呼ばれて誰でも知っているか  
ら、これも説明するまでもあるまい。アブラナ科ではこの外、タネツケバナというのがあ  
って、多く水田、水辺などに白花を開く。ハコベラは今も多くハコベと称し、小鳥の餌  
として、これも普通に知られている。植物学上の所属はナデシコ科に属し、先端の二  
裂した五弁の小さい花を開く。ナデシコ科にはこの外、ノミノフスマ、ノミノツヅリなどが  
あって、田圃の畔などに真白に咲き揃う。どちらも小さい葉が向き合ってつき、高さ二  
十糎内外の可憐な草であるが、ノミノフスマの方は五枚の花弁がそれぞれ深く二つ  
宛に裂けているので一寸見ると十弁のように見えるので、ノミノツヅリと区別される。ス  
ミレの仲間ですぼすミレ、シロバナスミレ、マルバスミレ、ヒカゲスミレなどと呼ばれる種  
類が白い花を開くが、慣れないとそれぞれの区別が困難である。ウマノアシガタ科で  
はイチリンソウ、ニンリンソウなどの白い花が路傍で眼につく。どちらも稍々陰地に生  
じ、葉は両者共深く裂け、イチリンソウの方はその名の通り多くは一輪、大きな五弁花  
を開くが、ニンリンソウの方は二輪と決まったことなく、一株から何輪でも開く。またどち  
らも毒草であるが、触ったくらいでは平気だから、沢山摘草して花束を作って見るのも  
面白い。この両種は西洋草花のアネモネと同じ仲間である。ユリ科に属するもので  
アマナと称する可憐な草があって細長い葉の間からなよなよした茎の先に一箇の六  
弁の花を開く。これも西洋草花のチューリップに縁の近い植物で、地下深い所に鱗  
茎があり、所によってはこれを食用とすることがある。

最後に紅色、紫色、藍色などの花を開く四月の野辺の草を尋ねて見ると、先ずセ  
ンボンヤリというのはタンポポに似て小さく、紫紅色の花を開くので一名ムラサキタンポ

ポともいう。オオイヌフグリというのは西洋から渡って来た雑草で、今は到る所に蔓延し、互生葉をつけた高さ二十糎内外の茎の上部に空色の愛らしい花を開く。花卉は



四枚あるように見えるがばらばらでなく、一つにくっついていること、雄蕊が二本しか無いことなどに気をつけるがよい。田圃の畔などに敷いたように沢山あって、淡紫色のお面のような面白い形をした花はサギゴケというものである。それから高さが三十糎から六十糎位になって直立し、四角な茎に、縁に鋭いギザギザがあって卵形をした葉を対生し、葉のついた節に桃色の花を沢山つけているものがあつたらそれはオドリコソウというものである。花の形が笠を被って踊る姿に似ているからこんな名がついたのであるが、こんな形の花を学問上では唇形花という。唇形花をもつたものにはこの外カキドオシ、ホトケノザ、キランソウ、ジュウニヒトエなどが見られる。その中ホトケノザは前に述べた春の七草のタビラコの名と同じであるが、それとこれとは勿論別物であるから注意せねばならぬ。ここでいうホトケノザは畑や路傍に出て、紅色の唇形花を開く。西洋の勿忘草に似た草がよく方々でこの頃見られるが、あれは勿論本当の勿忘草ではなく、キュウリグサというのが本名であるからこれも注意を要する。スミレの類には純料の濃堇色をしたスミレや淡い紫をしたタチツボスミレを初め、沢山の種類がある。スミレの葉は長いが、タチツボスミレの葉は心臓形をしているので葉だけでもわかるリンドウの類にフデリンドウとコケリンドウというのがあって、どちらも秋咲くリンドウより遙かに小さい。中でもコケリンドウの方が小さい。サクラソウやレンゲソウなどに就いては説明するまでもあるまい。レンゲソウと同じ科のマメ科の種類にスズメノエンドウ、カラスノエンドウ、カスマグサという三種があるが、スズメノエンドウは葉が小さく、数箇の小さい白紫色の花が集まって出で、莢は二個の豆を入れて外側に毛が生えている。カラスノエンドウは葉が少々大きく、先端が矢筈になっているので一名ヤハズエンドウともいわれる。花も大きく、紅紫色をして葉のもとに一二箇しか出ない。葉は長く、中に五乃至十箇の豆を入れ、外側には毛がなくて黒く熟する。カスマグサの莢の中の豆は四箇、その他すべての点で以上述べた両者の中間形を示すのでカラスとスズメの間、すなわちカトス間でカスマグサというのだそうである。

「愛育」第4巻第4号(昭和13年4月)掲載

※ 文中の表記は読みやすさを考慮して勝手ながら適宜直しています。

## 著者紹介・本田正次

昭和時代の植物学者。

1897（明治 30）年 1 月 20 日熊本市生まれ。

1921（大正 10）年、東京帝国大学理学部植物学科卒業、同大学助手となり、1931（昭和 6）年理学博士、1934（昭和 9）年助教授、1941（昭和 16）年植物調査のためフランス領インドシナに在留、1942（昭和 17）年母校の教授に。同理学部付属植物園長を歴任し、1957（昭和 32）年東京大学名誉教授。

イネ科を中心とする植物分類学の研究で知られる。

日本植物友の会会長、日本風景協会会長、文化財専門審議会専門委員、日本自然保護協会常務理事、日本庭園協会理事、国立公園協会評議員、東京都文化財専門委員、武蔵野文化協会理事長その他の役職を務めた。

1984（昭和 59）年 7 月 1 日死去。87 歳。



日光湯元での植物採集の一風景 ↑  
左は牧野富太郎博士（当時 60 歳代後半か）  
背後に聳えるのは前白根山

### おもな著作（手当たり次第）

『大綱日本植物分類学』（向坂道治共著）昭 5.4.25・総合科学出版協会

『大綱日本植物分類表』（向坂道治共著）昭 5.12・総合科学出版協会

『植物採集と標本製作』（久内清隆共著）昭 6.5.20・総合科学出版協会

『趣味の科学写真（野草の巻）』（本庄伯郎撮影、本田解説）昭 6・総合科学出版協会

『色彩図版 全植物辞典』昭 7.7.5・修教社書院

『日本植物名彙』昭 14.6.23・恒星社厚生閣・三省堂

『全植物辞典—色彩図版』昭 14・河野成光館

『大日本植物誌』（共著）昭 14～・三省堂・国立科学博物館

『動物と植物の生活 新日本少年少女文庫 7』（寺尾新共著）昭 15.5・新潮社

『武蔵野』（田村 剛共編）昭 16.5.25・科学主義工業社

武蔵野の野草（本田）、武蔵野の鳥（中西悟堂）他

『四季と植物』昭 16.7.18・厚生閣

『原色野外の樹木』昭 17.6.30・三省堂

『自然科学観察と研究叢書；第2輯 日本列島篇』昭 19・山雅房

『生物学概説』昭 23・師範学校教科書

『実や種子の散りかた』昭 26・岩崎書店

『植物の種類』（理科文庫 1）昭 26・三省堂出版

『動植物採集案内』（鍋木外岐雄共著）昭 27・旺文社

『くだもの画報』（講談社の絵本 69）昭 27・講談社

『原色 高山植物』（清棲 幸保共著）昭 28・三省堂

『原色 秋の野外植物』昭 29・『原色 春の野外植物』『原色 夏の野外植物』昭 31・三省堂

『植物文化財—天然記念物・植物』昭 32・三省堂

『郷土の花』（三省堂百科シリーズ）昭 32・三省堂

『日本種子植物分類大綱』昭 34・恒星社厚生閣

『植物の図鑑』（学習図鑑シリーズ 1）（牧野晩成共著）昭 34・小学館…改訂版多し

『理科観察の図鑑』（学習図鑑シリーズ 23）（井上 勤、両角 亮治共著）昭 37.9・小学館

『原色植物百科図鑑』（水島 正美・鈴木 重孝共編）昭 39・集英社

『四季の植物観察・少年少女日本植物記 4』昭 40・牧書店

『樹木三十六話』（上原 敬二、三浦 伊八郎共著）昭 41.1・地球出版

『原色県花・県鳥—物語と図鑑』（中西 悟堂共著）昭 42・東雲堂書店

『四季の花』昭 44・新学社

『草木春秋』昭 45・石崎書店

『私の植物紀行』（三省堂ブックス）昭 48.12.15・三省堂

『日本のサクラ』（花の選書）（林 弥栄共著）昭 49・誠文堂新光社

『天然記念物事典』（共編）昭 50・第一法規

『植物の観察と標本の作り方』（グリーンブックス 24）（矢野 佐共著）昭 52.1



・ニューサイエンス社

『季寄せ-草木花（春・夏・秋・冬各上下）』（山口 誓子、富成 忠夫、本田共著）昭 54-55

（同 朝日文庫版）昭 56・朝日新聞社

『日本植物記』（東書選書）昭 56.10.12・東京書籍

『植物』(小学館の原色図鑑 ポケット版 新装版 1)(牧野 晩成共著) 昭 56.1・小学館  
『学研生物図鑑 10・11 野草』(監修) 昭 56.3・学研  
『原色牧野植物大図鑑 正・続』(牧野 富太郎著、本田編集) 昭 57・北隆館  
『桜—花と木の文化』(松田 修共著) 昭 57・家の光協会  
『現代生物学大系(7 高等植物 a1)』『同(7 高等植物 a2)』(山崎 敬共著) 昭 58・59・中山書店  
『植物学のおもしろさ』(朝日選書) 昭 63.11.20・朝日新聞社  
『学研生物図鑑 10・11 特徴がすぐわかる 野草 改訂版』(監修) 平 2.3・学研  
『原色園芸植物図鑑 1-4』(林 弥栄・古里和夫共監修) 平 5.4.30・北隆館  
『原色ワイド図鑑—Picture encyclopedia (野草)』(矢野 佐共著) 平 6・学研  
『NHK わたしの自叙伝』(木原均編) 平 24.5・NHK サービスセンター・大空社  
など多数。改訂・増補版も数多い。

## 山口さんの自然講座

茂呂山に石器時代人がいた

休日に茂呂山へ行き始めたのは、もう何年前のことだろうか。

山で知り合った人のグループに、田野井さんがいる。みんな  
定年退職した人ばかりである。



今年のこと、田野井さんが山の頂上で石オノを見つけたという。それは、大谷石で作った祠のところに置いたと言って案内してくれた。一見、自然石のようだが、刃の部分が磨いてあり本物である。よく分かりましたねと言うと、博物館や骨董市でよく見ているからだという。

田野井さんは茂呂山の西側に畑を持っておられ、そこから石オノや土器片が出てくると話してくれた。それらを1ヶ所に置いていたそうだが、今は分らなくなっているらしい。

茂呂山で見つかった石オノは変成岩の黒色片岩で作ったもので、黒川に見られる岩石である。ほかにも何かないか探したところ、土器片を見つけた。田野井さん以外の人からは「それは植木鉢のかけらだよ」と言って笑われた。

茂呂山には、がっから様伝説がある。森が深くだれも入る人はいないとあるが、それよりも遙か大昔の人は、茂呂山の頂上にも住んでいたようである。(山口龍治)

## 八溝山地の小さな旅

～松倉山と鎌倉山、社寺・史跡探訪～

1月26日（日） 天気・晴朗なれど風あり時に雲あり

寒中にしては比較的暖かい日曜日、7人乗りの車1台で県東部の八溝山地の低山へ出かけてきました。

松倉山（標高 345m）は烏山市郊外の山里の背後に聳え、山上の観音堂には古くから村人が農耕馬を連れて詣でていた、身近な山だったようです。今は「環境保全地域」として、所々の木に名札が掛けられ整備された登山道を、様々の落葉樹の枝や実や落葉を気に懸け、シラカシやアカガシ、アラカシなどの常緑照葉樹の暗い木陰を縫いながら登って行きます。途中の隘路が車には通過困難に思えますが、山頂手前の観音堂の近くには駐車場もありました。古びた観音堂の日向に、今日唯一の昆虫を発見、カメムシの仲間の束の間の日向ぼっこでした。山頂は木立でさほどの展望はありませんが、八溝の山々が連綿と連なっているのが見えます。一人遅れた“隊長”を待ちながら昼食を店開きしました。



松倉山山頂にて  
日差しは暖かいようでも…

次第に強い風が吹き始めると気温も下がりが、いつものように時間もかかったの

で、山を下りると、次に目指す鎌倉山（標高 216m のやはり低山ですが）には車で山頂へ。眼下には那珂川流域の、雲に覆われて寒げな冬の田園風景が広がります。

真岡鉄道の蒸気機関車見物には時間が合いませんでしたが、道の駅もてぎに寄ってしばらく休み、帰宅の途に着きました。

※ 参加者(敬称略)

小川知峻、平井亜湖、小島美穂、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき(計7名)

※ 見た植物(各50音順)

(咲いていた木の花) ミツマタ、ロウバイ、(咲いていた草の花) オオイヌノフグリ、(生っていた木の实) イイギリ、キリ、コウヤボウキ、シロヤマブキ、ネムノキ、マユミ、(生っていた草の实) サラシナショウマ、(常緑樹) アオキ、アカガシ、アラカシ、ウラジロガシ、ツルグミ、モミ、シラカシ、(葉の落ちていた木) アカシデ、ケヤキ、クマシデ、サンショウ、(常緑のつる植物) キヅタ、テイカカズラ、ピナンカズラ、(シダの仲間) オオバノイノモトソウ、シシガシラ、マメツタ、(葉のあった草) イチャクソウ

※ 見た昆虫

オオトビサシガメ

今日見た唯一の昆虫  
オオトビサシガメ  
松倉山観音堂で  
日向ぼっこしていた



※ 参加者からいただいたおたより

一番楽しかったのは山登りです。高さはあまりないけれど横のはばが長いのでとても大変でした。やっと頂上に着いた時はうれしかったです。でもかんじんの隊長がどこかに行ってしまったのがおもしろかったです。

(北小4年・小川知峻)

※ 「隊長」は珍しい植物などに会おうと我を忘れて夢中になり、集団行動を逸脱することが多く、本当に度々迷惑をおかけしましたね。

※ 松倉山・鎌倉山行の風景



烏山大橋を渡って行く  
彼方に松倉山方面の山並



大木須小学校跡地に駐車  
(創立明治14年、閉校平成2年)  
今は「オオムラサキ公園」に



烏山かるた



のどかな里山風景  
の中に行く



空に広がるキリの枝



登山道入口



「自然環境保全地域」  
らしく木の名札も所々に



イギリスの大木の下に落ちた枯れ枝と散らばる赤い実



シラカシの大木



これはアカガシの葉  
葉柄の長いのが特徴



ケヤキの大木



観音堂近くまで車道が  
駐車場、竹の杖完備



山頂までもう少しの所に  
松倉山観音堂



松倉山山頂



山頂の祠



ひっそりと  
イチヤクソウが…



東側にはお日さま



西側には三日月

のどかな田園風景  
青い縞模様は麦畑か↓



昼なお厚い氷が張ったため池  
石を投げても割れない



咲いているのを見た  
唯一の草の花  
オオイヌノフグリ



鎌倉山山頂にて  
車で登りました



鎌倉山は低山ながら  
那珂川流域の展望が俯瞰できる

両毛線沿線、小さな旅  
 ～太平山神社より<sup>てるいしさん</sup>晃石山を越えて岩舟山へ～

遠い黒木の林の彼方になつかしい峠が真白に見える  
 あの峠の向うの山の湯その言葉だけでも胸はおどる。スキー  
 ーをはいて毎日ピクニックに、其の湯をかこむいくつもの山  
 へ登りに行くのだ。白い雪の国には黒い梅の林がいつも  
 待っていてくれる。枝も折れそうに雪が積って、時折の風  
 に粉と飛ぶ。村民の山頂のおはちと呼び慣れている古い  
 火口原でスキーを練習し、疲れると雪の上に座って、美し  
 い不二山や、ハヶ岳の長い線を眺める。広い雪の面  
 には梅鉢の様な兎の足跡や、小石でも転ばしたかと思われ  
 る小鳥のあるいた跡がついて居て、そのかくれて見えない小さな生物のこと等をじっと  
 考えていると、雪国の持つ静けさが沁々と感じられる。銀に輝く野や山を探り歩くのは  
 冬の楽しみである。



(黒田正夫・初子著「山之素描」(昭和6年10月20日、山と溪谷社発行)

節分、立春を迎え、すでに光の春。田んぼや野原ではオオイヌノフグリに加え、セイ  
 ヨウタンポポやナズナ、ホトケノザ、ヒメオドリコソウが咲き始める頃。里山でもウグ  
 イスカグラやアセビ、ヒサカキ等の花がそろそろ見られるかもしれません。今月は電車、  
 バスを利用して太平山神社より晃石山(標高 419m)、馬不入山を越え、岩舟山を目指  
 して歩いてみましょう。晃石山は栃木百名山の一座。山頂に一等三角点があります。

日 時：2月11日(火) AM 6:40 東武新鹿沼駅集合

(東武日光駅 6:26 発、新鹿沼駅 7:07 発の電車に乗車)

行 程：新鹿沼(7:07) == (7:31) 栃木(7:43) ——バス—— (7:55) 六角堂・  
 太平山表参道(20分) ……太平山神社(15分) ……太平山(15分) ……

ぐみの木峠 (30 分) ……晃石神社 (5 分) ……晃石山 (5 分) ……

晃石神社 (20 分) ……桜峠 (30 分) ……馬不入山 (35 分) ……車道

(30 分) ……高勝寺 (15 分) ……岩舟駅 = 栃木 = 新鹿沼 (時刻未定)

服 装 : 長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物 : リュックサック、水筒 (ポット)、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、

筆記用具、レジ袋、レジャーシート、おやつ、お弁当

必要に応じて : 双眼鏡、ループ、カメラ、ヘッドランプ、

参考書 (とちぎの社寺散歩、栃木百名山ガイドブック、栃木の山 150)、

1/25,000 地形図は「栃木」「下野藤岡」

参加費 : おとな 200 円、子ども 100 円、他に交通費として

東武線 350 円×2 + 往路バス 220 円 + 復路両毛線 190 円 (子どもは約半額)、

今年度初参加の方は保険料 800 円 (3 月まで)。

申し込み : 2 月 7 日 (金) までに、チャレンジスクール申込書で北光クラブ、

または阿部 (電話 090-1884-3774) まで。



## ☺ しつもんばこ ☺

### 小川知峻君からの質問

小川 捕ってきたヌカエビが死んじゃったんですけど、どうやったら飼育できますか。

阿部 ヌカエビは体長 2cm ほど。無色透明なので、大物ばかりに気をとられる大人が魚捕りをしても、その存在に気が付かないことが多いものです。御成橋の下の木島堀の入口の草場で捕れることがあります。水草などにたかっているのが水の流れのゆるやかな草場を好むようです。メダカや雑魚の稚魚は、空気ポンプや水草がなくても結構生きていますが、ヌカエビは小さいわりに酸素不足に弱く、必ずエアープンプが必要で、たかるための水草もあった方が良いです。餌はメダカの餌が良いと思います。ただしやり過ぎに注意し、水がいつも無色透明であるように水管理すること。上部式のフィルターに活性炭を入れておけば最高です。



## ☪ 読者からいただいたおたより ☪

明けましておめでとうございます。

本年も“鹿沼の自然・栃木の旅”に期待しております。

皆様の健康とお幸せを心よりお祈り致します。

5年ぶりに孫達と花木センターの高台に初日の出を見に

行ってきました。体調も元通り近くに回復している事を

神に感謝している毎日です。

今年も何かとよろしく願い致します。



(櫻井節子・写真も)

寒中御見舞申し上げます。

月報第20号御恵送賜わりまして真にありがとうございました。積み重ねること20号、阿部様の並々ならぬ熱意、御努力に敬意を表します。今号の尾崎喜八も田部重治とつながりの深い人物ですね。表紙の「山の繪本」所収の“高原にて”の田部先生を描いた散文詩は、私の愛読するところです。様々な思いから注がれる視線は十人十色百人百様、極めて興味深く、研究の大きな種になっています。厳寒の折、御自愛くださいませ。乱筆乱文にて。

1月25日

(田部重治研究会・白坂正治)

### 小野彰史氏との会話

小野 阿部さん、僕は前から疑問があるんだけど、どうして春は黄色い花が多いんですか。

阿部 それはですね、ほら、「幸せの黄色いリボン」ってあるじゃあないですか。

神様は厳しい冬を耐え抜いた者たちに「幸せの黄色い花」を下さるのです。

小野 なるほど。それで生物学的にはどうなんですか。

阿部 ……。

小野彰史氏は内科医師で、野鳥観察のエキスパートです。この質問については事務局で研究中。次号をお楽しみに。



☞ 本号の内容 ☜

表紙の本	本田正次『四季と植物』	2
山口さんの自然講座	茂呂山に石器時代人がいた	8
活動報告	八溝山地の小さな旅～松倉山と鎌倉山、社寺・史跡探訪～	9
次回案内	両毛線沿線、小さな旅～太平山神社より晃石山を越えて岩舟山へ～	13
しつもんばこ		14
読者からいただいたおたより		15

**会報の購読について**

会報はインターネットでご覧になれます。  
また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭に置いてあります。(無料)  
確実な入手をご希望の方は、年会費(1,200円)をお納めいただければ、  
ご自宅まで郵送いたします。



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第21号

2014年2月発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ



検索